

第三百五十七回 青葉会

平成二十七年十二月十日(木)

師走恒例寄席見物(末廣亭・昼席)
年忘れ句会 丸紅来客食堂・談話室

(選者)

◎

川口孤舟

(参加者)

今井紀久男 柿崎忠彦

川口孤舟

後藤保明

小西弘子

豊田ゆたか(清記まで参加)

中山芳博 山内天牛

〈特別参加・選句のみ〉 平松通朗 堀口康弘
土谷堂哉 古田昇 渡邊盛雄

(投句)

《互選句》

四点

◎

末廣亭耳の後ろのすきま風

弘子 (忠・孤・芳・天)

◎

中入前やつと笑ひし冬の寄席

天牛 (紀・孤・保・芳)

◎

病室は小さき宇宙冬ぬくし

盛雄 (忠・孤・保・芳)

三点

◎

扇遊の齒切れ良き芸年忘る

忠彦 (紀・孤・天)

◎

風まかせ湖面漂うかいつぶり

保明 (孤・康・天)

冬夕焼伊吹にもぐり闇へ溶け

芳博 (弘・通・康)

独り居の厨は虚し街師走

盛雄 (紀・芳・天)

二点

◎

出囃子に志ん馬を偲ぶ年の暮

紀久男 (忠・弘)

◎

店の灯の鋭角に点く冬曇

弘子 (孤・保)

嘶家の羽織の袖を凧に脱ぐ

全 (忠・孤)

南平さんそこに来てゐる師走寄席

全 (忠・芳)

雑炊になりてぼつりと本音かな

堂哉 (弘・康)

軍歌・ジャズ時代映して暮の寄席

ゆたか (忠・孤)

歳末の寄席や酌みたし徳利酒

全 (孤・保)

◎

年の瀬の人情咄に気の和み

全 (紀・通)

デパ地下へ妻に引かれて年用意

昇 (紀・芳)

涙して笑ふ冬寄席権太楼

天牛 (忠・弘)

一点

◎

年の瀬や寄席の棧敷に身を委(ゆだね)

紀久男 (通)

歳末や年金受給者寄席集ふ

忠彦 (康)

権太楼はスマホ嫌いと師走寄席

全 (紀)

川柳の軍歌で笑ふ年の暮

全 (康)

寒風の街にはためく寄席幟

孤舟 (弘)

昼寄席のはねて師走の人混みへ

全 (弘)

銀杏落葉拾つて見せる幼き子

保明 (天)

一門の末の広さよ風邪代演

弘子 (保)

日捲りやことまごまと冬構

堂哉 (保)

冬麗の遠富士を背に海しづか

昇 (通)

神域や枯葉集まる日溜りに

芳博 (天)

みすずかる信濃広ごり雪しんしん

全 (通)

バツカスも加はりをりてキリタンポ

全 (康)

甚五郎の動くねずみや冬の寄席

天牛 (孤)

●次回青葉会

正月五日(火) 吉例初芝居見物(歌舞伎座・昼の部)

一月二十八日(木) 初句会 午後五時半〜八時半 丸紅 コンチエルト

二月二十五日(木) 午後五時半〜八時半 丸紅 コンチエルト談話室

以上文責 紀久男

平成二十七年十二月句会報

一 落語情報の月刊誌「東京かわら版」を見て、久しぶりの末廣亭に決めたんですが期待外れの低調ぶりです。いまひとつ楽しめませんでした。それでも作品にありますように中入り前の権太楼とトリの扇遊は流石に好い気分させてくれました。

弘子さんが詠んだ南平和夫さんは末広に奥様といつも東側棧敷で見物されておられたこと憶い出します。

末広の「寄席だより」に橘家円蔵81歳で他界したこと(10月)載せておりましたが、かつて「四天王」(志ん朝、談志、円楽、柳朝あるいは円蔵)の一人として謳われた全盛時の俳(才気と芸)は近年全く失せ、見る影もありませんでした。売れっ子時代の掲載写真に小生最良の志ん馬(二年前に急死)が並んでおりました。

11月の大滝さんの落語会で落語カフェ(神保町)の御主人は志ん馬師匠の御内儀(おかみさん)よりの清酒寄贈と志之輔が彼の芸(立て板に水のべらんめえ)を惜しんでいたと披露してくれました。

二 年忘れ句会にゲストお二人:平松(旧姓古市)通朗さん(S40)46審査部。水泳部と囲碁部)、堀口康弘さん(S44入社、法務・関連事業・総務)の共通点は高校の同窓。かつて川合先生御夫婦や村岡さんらと会食(吉祥寺で小生の快気祝)し、青葉会報も読んでおられるようですが、句を作る経験は無いようです。句会席上、選句した理由、選ばなかつた理由を明解に発言され、更に万里子先生が添削されたように何故作れないのかと疑問を呈され出席者も耳が痛かつたようです。弘子さんの小粒饅頭(京都の仙太郎)、保明さんの金沢土産・森八の「福梅」(最中)、通朗さんの伊勢土産「絲印煎餅」、三恵さんからの桂新堂の海老煎餅(名古屋)、忠彦さんの大吟醸「刈穂」(秋田)、小生の「メ張鶴」(新潟)、芳博さんの大麦焼酎「吾空(ごころ)」(福岡・八女)など寄贈の甘辛を賞味。当日のNHK放映の丸紅情報システムズのドローン検知システム。前日の日経紙の「環境エネルギー広告特集」(エコプロダクツ2015開催:東京ビックサイト)に大手メーカーに伍して掲載の富安(とみやす)の太陽光パネル架台。そして先生の御恢復ぶり等を話題。

披講は久しぶりに弘子さん。ゆたかさんが腕を上げておられる詩吟を御披露。今年萬緑新人賞の弘子さんに落語協会カレンダー、三代目選者を引受けられた孤舟さんといつも小生の乱筆悪文をワープロをしてくださっている忠彦さんに歌舞伎座のカレンダーを進呈。

三 恵洲さん、彦十さんが最良されてる「東京やなぎ句会」は2011年に500回を超えておりますが、メンバー8名(五百回時点)の内、二年前に小沢昭一、今年桂米朝、入船亭扇橋、加藤武と相次いで亡くなり継続が危ぶまれております。三人の遺句から好みを抄出してみました。

はるの雪誰かに電話したくなり

法善寺ぬけて帰ろうはるの雨

うちの子でない子がいる昼寝覚め

もう一本たのむよと云う京しぐれ

— 八十八(やまほち) (米朝)

新蕎麦やむかし庄屋の婆が打つ

襖絵と座して落葉の音をきく

旅をきて時雨るる町のポストかな

餅花や飛驒の柱の黒光り

— 光石(扇橋)

肚くり生きる他なし去年今年

黙劇の見えざる蝶をひしと追う

向き合うて新蕎麦する痛み分け

割引の寄席に入れば時雨けり

— 阿吽(武)

皆様どうか佳いお年をお迎え下さい。

平成二十七年歳末

紀久男記